美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

11

2021 November/December

TAKE FREE

NO.68

特集

酒井家 庄内入部400年①

庄内憧憬

佐藤正光

中国古典文学研究者

Cradle 11

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2021 November/December

令和3年11月1日発行（偶月奇数月発行）第12巻2号（通巻68号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市京田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

酒田市／鳥海山・鶴間池

神秘の鶴間池 無垢なる森に囲まれて

荘内銀行

庄内藩校致道館という学校の魅力

佐藤 正光

合理的な発想と基礎教養を身につけた生徒たちは、「学ぶ」ことから「問いを発する」立場になる。庄内の気風を今頃になって感じている。

江戸の儒者荻生徂徠は独自の学問を考案して、「徂徠学」を全国に流行させた。その学風は儒学の根本である「道」を政道（政治の理念）と捉え、実践的で合理的な思考によって、理想的な政治を実現することを理念とした。その思想に傾倒した多くの人たちの中に水野元朗と疋田進修という庄内藩士がいた。二人は江戸藩邸でお勤めの傍ら、晩年の徂徠に師事した。二人の熱心な態度に応えた徂徠は水野、疋田宛の往復書簡を送り、今も「徂徠先生答問書」として致道博物館に所蔵されている。とくに徂徠は当時二十代だった進修を気に入って字（成人してつける名）を贈った上に、「疋田進修の字の説」（説は意見、考えの意）という文章まで著した。

その徂徠の教育理念を実現した学校が、庄内藩校致道館である。庄内に帰った元朗に学んだ加賀山寛猛は元朗の娘婿白井矢太夫の師となり、白井は江戸で徂徠の弟子太宰春台らに教えを受け、庄内に帰って致道館の初代祭酒（校長）となった。白井は徂徠学を忠実に守って天下国家を治める道を大義とし、学問は抽象的な哲学や漠然とした理想ではなく、実践的な政治道徳を身につけるためのものとした。目標が具体的なので藩校の生徒には学ぶ意義が分かりやすい。合理的な発想と基礎教養を身につけた生徒たちは「学ぶ」ことから「問いを発する」立場になる。生徒同士が議論をして答えが見つからない時、教授のもとにゆき指南を受ける、今の大学の演習やゼミのようなもの。その上の段階では藩校内に自分の部屋が与えられ、終日そこで自由に過ごせた。必要な書物がそろっていて自由に好きなだけ勉強ができる。例えば私の研究室にも、昼も夜も卒論の調べ物をしている学生がいるように。鶴岡市の致道館のホームページにその教育課程の丁寧な説明がある。現在、中高一貫校が学力を伸ばすといわれるが、致道館は小中高大一貫校だった。とはいえ皆が学問一筋だったわけではもちろんなく、生徒たちは休憩になると広間で相撲や格闘技をして元気いっぱいだったという。

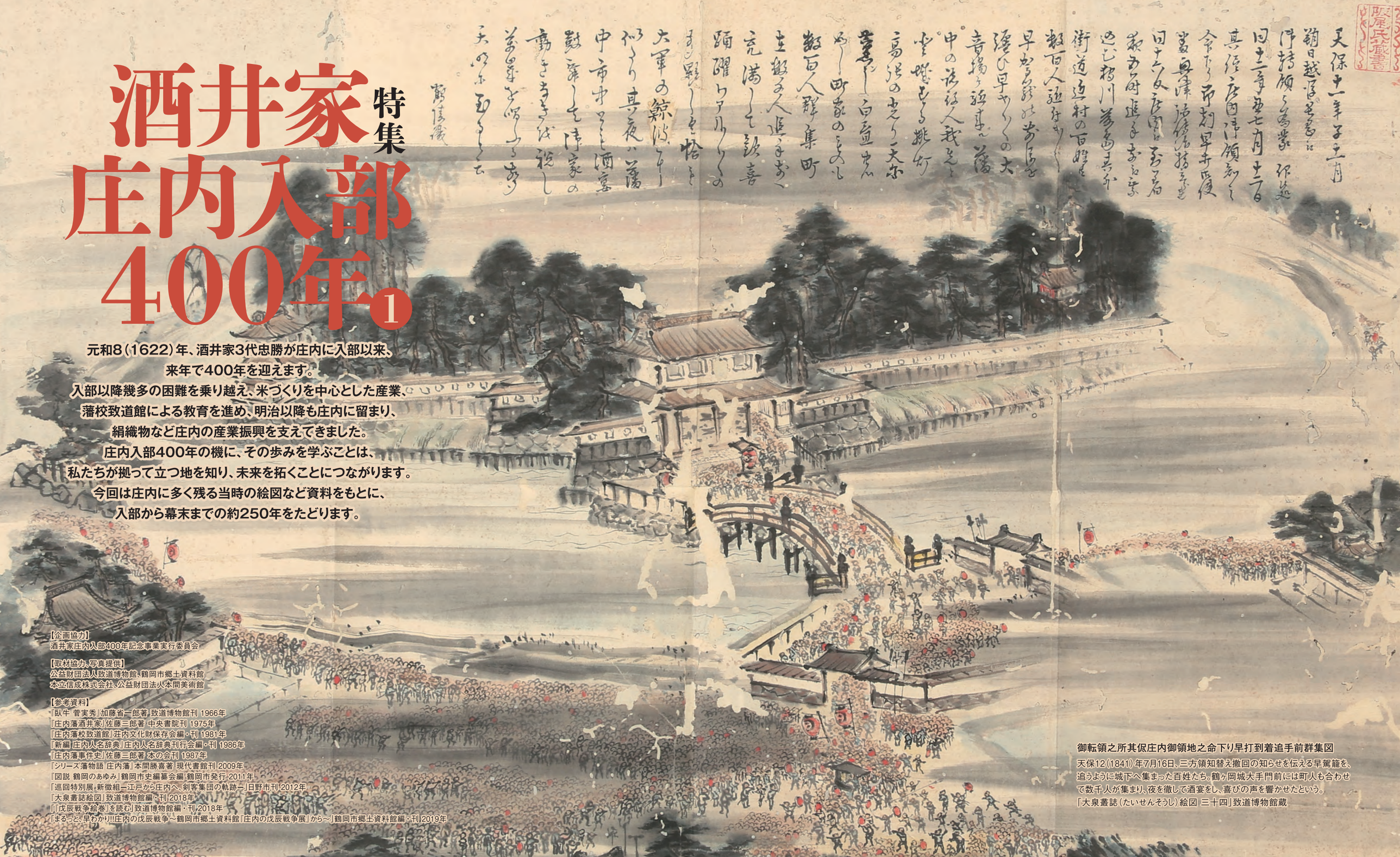
私は高校時代サッカーばかりに熱を上げ、予備校に通って学問の面白さを知り、「ゼミの武蔵」といわれる大学で多くのゼミに入って教授に質問ばかりしていた。庄内の気風を今頃になって感じている。

旧庄内藩校致道館の講堂と庭。東北で唯一現存する藩校建造物。

さとう・まさみつ／鶴岡市出身。武蔵大学人文学部日本文化学科卒業。二松学舎大学大学院中国学専攻博士課程修了、文学博士。現在は東京学芸大学教育学部教授、一橋大学大学院連携教員。東京学芸大学排球部長。東京学芸大学附属国際中等教育学校前校長。専門は中国古典文学、特に魏晋南北朝の貴族文学。NHKカルチャーラジオ「漢詩をよむ」に出演、講師を務める（土曜午後8時30分～9時）。

酒井家庄内入部400年 特集 1

元和8（1622）年、酒井家3代忠勝が庄内に入部以来、
来年で400年を迎えます。
入部以降幾多の困難を乗り越え、米づくりを中心とした産業、
藩校致道館による教育を進め、明治以降も庄内に留まり、
絹織物など庄内の産業振興を支えてきました。
庄内入部400年の機に、その歩みを学ぶことは、
私たちが拠って立つ地を知り、未来を拓くことにつながります。
今回は庄内に多く残る当時の絵図など資料をもとに、
入部から幕末までの約250年をたどります。



御転領之所其侭庄内御領地之命下り早打到着追手前群集図

天保12（1841）年7月16日、三方領知替え撤回の知らせを伝える早駕籠を、追うように城下へ集まった百姓たち。鶴ヶ岡城大手門前には町人も合わせて数千人が集まり、夜を徹して酒宴をし、喜びの声を響かせたという。
「大泉叢誌（たいせんそうし）絵図 三十四」致道博物館蔵

【企画協力】
酒井家庄内入部400年記念事業実行委員会

【取材協力、写真提供】
公益財団法人致道博物館、鶴岡市郷土資料館
本立信成株式会社、公益財団法人本間美術館

【参考資料】
『臥牛 菅実秀』加藤省一郎著 致道博物館刊 1966年
『庄内藩酒井家』佐藤三郎著 中央書院刊 1975年
『庄内藩校致道館』荘内文化財保存会編・刊 1981年
『新編 庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会編・刊 1986年
『庄内藩事件史』佐藤三郎著 本の会刊 1987年
『シリーズ藩物語 庄内藩』本間勝喜著 現代書館刊 2009年
『図説 鶴岡のあゆみ』鶴岡市史編纂会編 鶴岡市発行 2011年
「巡回特別展 新徴組ー江戸から庄内へ、剣客集団の軌跡ー」日野市刊 2012年
『大泉叢誌絵図』致道博物館編・刊 2018年
『「戊辰戦争絵巻」を読む』致道博物館編・刊 2018年
「まるっと、早わかり!!庄内の戊辰戦争～鶴岡市郷土資料館「庄内の戊辰戦争展」から～」鶴岡市郷土資料館編・刊 2019年

特集
酒井家
庄内入部
400年❶

酒井家入部

戦国時代、庄内支配の状況は目まぐるしく変わりました。関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利し、江戸時代を迎えると、山形藩の最上義光（よしあき）が庄内を治めますが20年ほどで改易となります。新たに庄内統治を任されたのは、徳川家譜代の大名酒井家3代忠勝でした。

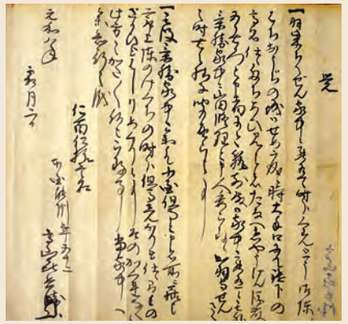
歴史に残る「徳川四天王」、その筆頭といわれたのが酒井家初代、忠次です。酒井家はどのような家柄だったのか、また入部後の藩政について、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんに伺いました。「忠次は家康の15歳上で義叔父にあたります。徳川家が大大名へとのし上がり権力を確立していく、その土台を支えた重要な存在でした。三河統一の際も旗頭を任され、多くの戦や大名間の外交でも活躍しました」。酒井家が信濃国松代（長野県）から庄内に入部したのは元和8年（1622）、3代忠勝の時。最上家の改易によって領知が譜代大名らに分与され、酒井家は庄内領約13万8千石を与えられました。忠勝は鶴ヶ岡城を居城とし、亀ヶ崎城（酒田）を支城として城代を置きます。

「酒井忠勝肖像」2代家次の時代に三河国吉田（愛知県）から下総国臼井（千葉県）、上野国高崎（群馬県）、越後国高田（新潟県）へと転封を繰り返し、忠勝の時代に越後国高田から信濃国松代（長野県）、そして出羽国庄内（山形県）へと入った。致道博物館蔵

戦乱の世を終えた時代の変わり目である江戸前期は、転封や取り潰しが全国的に頻発。幕藩体制も安定せず、庄内でも酒井家のお家騒動が起こるなど、領内統治が不安定な時期でした。寛永9（1632）年には、肥後国熊本を治めていた加藤忠広（清正の子）が改易、庄内藩預かりとなり、櫛引の丸岡城に移される一件も。そうした中で忠勝は、信濃国松代からの家臣や諸国の武士、最上家の浪人などを多く召し抱え、鶴ヶ岡城の大規模な整備を進めます。新たに設けた三の丸に家臣を集住させ、菩提寺の大督寺や役所などを置いて本城を築きました。また、最上氏時代の町割をもとに、城下町を整備します。城を取り囲むように商人や職人が住む町人町を14町置いて、政治的、経済的な都市計画を進めていきました。

また、忠勝が入部してすぐに行ったのが、庄内藩政で唯一の「一斉検地」です。農民が納める年貢が幕藩の財政の基盤だったこの時代、検地の目的は耕地の生産高を把握すること。これにより庄内藩の内高（実際の石高）は大幅に増加しました。さらに寛永2（1625）年には「定免法」を導入します。「それまでは1年ごとの収穫量によって年貢を決めていたのが、過去5～20年の平均から徴税額を決める方法が採られました。不作凶作が続くと村は困窮し、領民の反発はかなり強かったようです」。そのため遊佐郷の領民らが大量に秋田方面に逃げ出す「欠落（かけおち）」も起こります。

時代の変わり目という混乱の中にも忠勝はそうして城を整え、人々を集めてまちをつくり、新しい時代に向けて藩政の基盤となる支配体制を敷いていきました。



主君と禄を失った最上家の浪人たちは再仕官を求めて、自らの功名書きを藩に提出。就職活動の履歴書のようなもの。致道博物館蔵

現在の市役所前、江戸期の馬場町十日町口通り。忠勝の時代に始まった城下町の整備はその没後も続き、60年近くをかけて終了した。家数4000余軒、人口17000余人と町の規模は最上氏時代の5倍近くに拡大した。『四方喜我志満』より「馬場町十日町口通りの図」本間家旧本邸蔵

初代忠次が合戦で手柄を立てたことから家康より贈られた「太刀 銘 信房作」と拵（こしらえ）「金梨子地葵紋散糸巻太刀拵」。忠次は織田信長との交流もあり「太刀 銘 真光」も拝領している。いずれも国宝。致道博物館蔵

「徳川十六将図」では一番上の家康の左下に酒井忠次が描かれ、家臣団の別格であることが分かる。致道博物館蔵

《年表》

400～350年前

- ●元和8（1622）
  信濃国松代10万石から酒井忠勝が入部。13万8千石の庄内藩が成立
- ●元和9（1623）
  - ・領内の総検地の実施
  - ・町割を開始
- ●寛永9（1632）
  熊本藩主加藤忠広が酒井家預かりとなり、庄内藩領は14万石に
- ●正保4（1647）
  忠勝の死去により忠当が藩主に。三男忠恒に松山2万石、七男忠解に大山1万石を分地、2つの支藩が成立する
- ●承応元（1652）
  忠勝の弟、酒井長門守忠重が策謀したお家騒動は失敗に終わり、忠当は長門守を金2万両で義絶した
- ●元禄2（1689）
  松尾芭蕉が河合曾良を伴い、羽黒・手向に入る

コラム 一

松尾芭蕉と庄内俳壇

松尾芭蕉「玉志亭唱和懐紙」山形県指定文化財 本間美術館蔵

松尾芭蕉が「おくのほそ道」紀行で庄内に入ったのは元禄2年6月3日。羽黒山を下り、同10日には庄内藩士の長山重行の邸宅に到着して句会を開き、3日を過ごしています。鶴岡の人々はここで交流を深めたのを機に、芭蕉が旅を終えた後も師事し「美濃派俳壇」を形成、町人文化として栄えました。芭蕉は酒田の伊藤不玉邸などにも逗留。「玉志亭唱和懐紙」が本間美術館に所蔵されています。

特集 酒井家庄内入部400年❶

藩政改革

庄内は天恵の沃野、正に之を以て国を立つべき楽土なり――
3代忠勝のこの言葉通り、庄内平野はのちに
日本屈指の穀倉地帯へと発展します。
その土台ができたのは、多くの先人たちが懸命に生きた
庄内藩の〝改革の時代〟です。

徳川幕府の「米本位制」による財政基盤によって、農政をめぐる改革に揺れた江戸前期から中期。鶴岡市郷土資料館の今野章さんと、当時の領民の暮らしぶりについてたどってみます。

「庄内の領民は豊かではなかったかもしれませんが、例えば家族の病気などによる不慮の支出等がなければ、何とか生活はできていたようです」。しかし藩への不慮の出来事は容赦なく降りかかります。宝永4（1707）年の富士山噴火災害復興による東海道宿普請のように、幕府から大掛かりな土木工事への手伝普請をたびたび命じられて工事費がかさみ、また、7代藩主忠寄が幕府の老中となって支出が増加するなど、さまざまな要因が重なって財政を圧迫します。さらに度重なる大凶作が追い打ちをかけ、領民には御用金や年貢の増徴が課せられ、厳しい倹約令も敷かれました。「不慮の出費に充てるため、藩は領内の富裕層から多額の御用金を徴収しました。今は酒田が商人町といわれますが、鶴岡にも豪商はいて、藩財政への借財によって没落した商家もありました」。商人の台頭は江戸だけでなく庄内でも見られ、特に酒田の本間家は廻船問屋として財を成していました。9代忠徳はその商才と財力に着目し、3代光丘を登用して財政改革にあたらせます。光丘が出した「安永御地盤組立」は、3カ年を見据えた収支予算案でした。光丘は藩の借り入れを整理し、幕府から借用していた2万両を返済するなど成果を出しますが、相次ぐ凶作や手伝普請などで頓挫し、財政は行き詰まりに陥っていきます。

そんな局面を救ったのが郡代の白井矢太夫、庄内における「寛政の改革」の立役者です。白井は忠徳の求めに応じて財政再建の改革案を提出、その施策は困窮する農民に対し藩からの貸付米金を切り捨てるなどの、いわゆる「徳政令」でした。この時、本間光丘も案を提出しますが採用ならず、本間家が再び財政改革に参画するのは4代光道、天保の時代に下ります。また白井は、士風の刷新には教育の振興が必要と進言。忠徳は藩政を担う人材の育成を目的とした学校の創設に着手します。そうして文化2（1805）年「個性と自主性を重んじる」徂徠学を採り入れた「藩校致道館」が開校しました。

致道館では武芸も奨励する一方で、磯釣りや鳥刺しなど野外に出かける野遊びも盛んに行われました。その目的は心身鍛錬で、竿を握って磯魚や小鳥を獲ることよりも、猟場までの遠い道のりを歩くことを武用の一助とするなど、自己と向き合い鍛錬に励みました。こうして藩士たちは「個性伸長」を旨とした学問を通して士風を磨きながら、時代は江戸後期、幕末へと向かっていきます。

“日本一の大地主”と称された酒田の本間家は奥羽諸藩への大名貸も行っていた。特に庄内藩には貸付だけでなく資金援助も惜しみなく、藩の運営を大きく支えた。「本間光丘像」本間家旧本邸蔵

《年表》

300~200年前

- ●宝永4（1707）
  富士山噴火災害復興のため東海道宿普請を仰せつかり、6カ所の手伝普請を受け持つ
- ●寛延2（1749）
  7代忠寄が老中となる
- ●安永5（1776）
  本間光丘が「安永御地盤組立」を提出
- ●天明元（1781）
  本間光丘が「天明御地盤組立」を提出
- ●寛政7（1795）
  寛政の改革
- ●文化2（1805）
  大宝寺に藩校致道館が落成
- ●文化4（1807）
  蓮台火事により家屋1300戸が類焼
- ●文化13（1816）
  致道館を十日町口に移築

コラム二

藩校教育とゼミナール

出典「庄内藩校致道館」HPより

全国にある多くの藩校では、道徳的な教養を身につける朱子学を教学としていましたが、致道館では道徳を学びながら実践的な考え方に重きを置く「徂徠学」を採用していました。10歳で入学すると、年齢を問わず学力に応じて進級し、小学校から大学院課程まで学ぶことができました。個性を伸ばすこと、自ら学ぶ力をつけることを重視していたため、基本は自学自習。その結果を数人で討論して研究を深める「会業」、今でいう大学のゼミナールが致道館ではすでに行われていました。

庄内藩の武士たちは総じて「野合」といわれる磯釣りや鳥刺しに熱中していた。
夜が明ける前から家を出て、海へ山へと数十キロも歩いて向かったという。
「庄内浜磯釣りの図」（旅河家史料）鶴岡市郷土資料館蔵

田植えは家族、親類総出で行った。絵図には「はんこたんな」をつけた女性の姿が見える。
稲刈りや脱穀、俵詰めなどを経て、11月末の期日に間に合うように村ごとに藩の米蔵に年貢米を納めた。
「大泉四季農業図」より田植えと年貢納入の図 致道博物館蔵

特集 酒井家庄内入部400年❶

三方領知替え

10代藩主忠器の藩政時代、「百姓たりと雖も二君に仕えず」とのスローガンのもと、数百人の百姓が江戸に上り、駕籠訴を繰り返した三方領知替え阻止運動。280日にも及ぶこの運動は、幕府の命令が撤回されるという前代未聞の結末につながりました。

天保4（1833）年、半年の間に大洪水と大凶作、大地震、大津波に見舞われた庄内藩。その傷跡も癒えない天保11年11月1日、「庄内藩主の酒井忠器を長岡に、長岡藩主の牧野忠雅を川越に、川越藩主の松平斉典を庄内に」という三方領知替えの幕命が突然出されました。

早追によってその知らせが庄内に伝わると、同月22日には西郷組の百姓が雪深い山を越えて江戸上りを決行。宿の通報で失敗に終わりますが、それに続く川北一番上りが江戸城前で駕籠訴を実現させます。その後も庄内一円の百姓が次々に江戸へ。大老や老中だけでなく、水戸藩主や上野の寛永寺など有力な大名や寺院にも領知替え反対を訴えました。同時に庄内各地では、百姓たちが数万人規模の反対集会を何度も開催。地域全体を巻き込んだ大騒動となります。

なぜ百姓たちがそれほどまでに強く反対したのか、致道博物館主任学芸員の菅原義勝さんは「転封反対を訴える百姓たちの訴状には、天保4年の飢饉で藩が配給米などの救済策を工面したため、領内に一人も餓死者を出さなかったことについて書かれています。実際は、領知替えにあたって酒井家から百姓に課せられる負担や、新しく来る川越松平氏の苛政への危惧もあったようです。いずれにせよ、主君の善政を理由に転封反対を叫ぶ百姓の姿は、幕府の要人や他藩の大名がうらやむほどのものでした」と話します。一方、藩としても幕命には絶対に背けない立場でありながら、何も落ち度のない酒井氏が、大幅に石高が減ることとなる長岡へ転封させられることに対し、内心では納得していなかったといいます。「その中で百姓たちの動きが世の中に影響を与えていたのも確かで、藩役人は江戸に来た百姓たちにこれ以上駕籠訴をしないよう説得することはあっても、厳しくとがめたりはせず、むしろ江戸藩邸で大根汁などの食事を振る舞ってから、国許に帰したりしていたようです」。

天保12年7月、三方領知替えは百姓たちの反対運動に加え、転封を推し進めていた徳川家斉と川越藩松平氏が亡くなったこと、外様大名や幕閣からも反対の声が高まったことなども重なり、徳川家慶によって撤回されました。その知らせがもたらされた庄内では、庄内一円の武士、町民、百姓が一緒に喜び、祝ったといわれています。その後、庄内藩は水野忠邦によって報復ともいえる過酷な印旛沼疎水工事を命じられ、大きな負担と犠牲を払いますが、幕命を覆したこの一件は、幕府権力の弱体化を象徴する出来事として歴史に刻まれるものとなりました。

領知替え中止となった天保12年7月、鶴岡七日町橋脇の伽羅屋（床店）が店先で、通行の人々に祝い酒を振る舞った。「夢の浮橋」致道博物館蔵

天保12年1月、川北一番上り11人が、江戸城の大手門を出てきた水野忠邦たち老中に駕籠訴を実行した。「夢の浮橋」致道博物館蔵

天保12年4月、中川通荒屋敷（現在の藤島地域新屋敷地区）で、領知替えに反対する百姓たちの大集会が行われた。この規模の集会は他にも庄内各地で何度も行われた。「夢の浮橋」致道博物館蔵

《年表》

188～178年前

- ●天保4（1833）
  - ・最上川や赤川の大洪水が起きる
  - ・冷夏による大凶作となる
  - ・大地震が起き、加茂に9メートル近くの津波がくる
- ●天保9（1838）
  郷村の救済を図る農政改革を実施する
- ●天保11（1840）
  三方領知替えが申し渡され、庄内百姓たちの反対運動が始まる
- ●天保12（1841）
  将軍家慶より三方領知替え撤回が伝えられる
- ●天保14（1843）
  庄内藩に印旛沼疎水工事命令が出る

コラム三

きつねめん

藩主が「お居なり」になったことを受けて、領民が藩主に献上するために菓子商に依頼して作った打ち菓子。「居成」を「稲荷」にかけていて、現在でも縁起菓子として鶴岡市内の各菓子店で販売している。

特集 酒井家庄内入部400年❶

戊辰戦争

265年にもわたる徳川幕府による支配が続いた江戸時代。幕末期は庄内藩にもさまざまな難局や試練が訪れ、ついには会津藩と共に新政府軍の征伐対象となってしまいました。そして「負けなし」といわれた庄内藩の戊辰戦争へと突入していきます。

江戸幕府の沿岸警備の強化に向けて、庄内藩に品川御台場の警備と西蝦夷地の警備・経営が命じられた江戸末期。家督を継いで1年で急逝した酒井忠寛に代わり、忠篤が13代となった翌年の文久3（1863）年には、江戸市中取締りも命じられ、同年に委任された新徴組・小林組（後の大砲組・新整組）と昼夜巡回を始めます。以後、庄内藩は国許・江戸・蝦夷の3つの支配体制を持つこととなり、1年交代で人員を大きく入れ替えながら、江戸の治安維持に努めました。

その頃、国許では藩政への不満をもつ一部家臣たちが企てた藩政改革が明るみになり、慶応2（1866）年11月より彼らの一斉捕縛が始まりました。いわゆる大山庄太夫一件（丁卯の大獄）です。鶴岡市郷土資料館の今野章さんは「当時、忠篤がまだ15歳と若かったこともあり、庄内藩の政治的な判断はすべて父親の忠発が下したと思われます」と話します。

翌3年12月25日、庄内藩が幕命により薩摩藩邸を焼き討ちします。幕府を挑発するために江戸で乱暴を働く浪人を薩摩藩が扇動していたことが理由でした。翌年の1月3日、鳥羽伏見の戦いが勃発。混乱の最中、忠篤と藩士たちは江戸から庄内に戻ってきます。「この頃、新政府は『庄内藩が恭順の意を示し、藩主が謹慎すれば処分なし』との方針を出していました。庄内藩もそのつもりでしたが、事実上解体した幕府から江戸市中取締りなどの手当として受け取った寒河江・柴崎の領地支配を、2月後半から始めたのです。それが原因となり、ついに征伐対象となってしまいました」。

慶応4（1868）年4月、新政府軍は仙台から山形に入り、新庄に進軍してきます。24日に清川口で戦火が上がると、庄内藩は酒田本間家による最新式の武器による武装と、江戸市中取締りで培った統率の取れた軍勢によって、各地で連戦連勝の強さをみせます。しかし同盟軍が次々と敗北することを受け、降伏を決断。新政府軍が鶴ヶ岡城下に入り、忠篤と参謀黒田清隆が致道館で会談します。9月28日のことでした。「ただ庄内藩は余力もあったし、ドイツからの武器輸入の話も進めていたので、降伏については相当意見が分かれたようです。最終的には忠発が決めましたが、これ以上戦を続けていれば、会津のように城下が焼け野原になっていたかもしれないし、その後の西郷隆盛との親交もなかったでしょう。ギリギリでの英断だったと思います」。こうして江戸時代に幕を降ろした庄内藩は、以後、新たな時代へと歩みを進めていきます。

北に進軍した庄内藩の一番大隊と二番大隊は慶応4年8月、横手で新政府軍・秋田藩軍と激戦。横手城を陥落し、秋田藩兵の遺体を竜昌院に丁重に葬った。「戊辰戦争絵巻」致道博物館蔵

慶応4年4月、庄内藩の戊辰戦争の始まりとなった清川口での戦い。仙台方面から進軍してきた新政府軍を、松平隊が最上川を挟んで迎え撃った。「戊辰戦争絵巻」致道博物館蔵

慶応3年12月25日、主力の庄内藩1000人に、諸藩の1000余人を加え、薩摩藩邸を包囲し、焼き討ちした。「薩州屋敷焼撃之図」致道博物館蔵

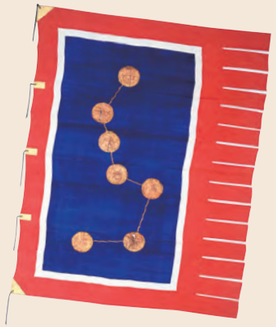
《年表》

177〜153年前

- ●弘化元（1844）
  庄内藩預かりに反対する天領百姓の大山騒動が起きる
- ●安政元（1854）
  品川御台場護衛を命じられる
- ●安政5（1858）
  コレラが流行する
- ●安政6（1859）
  蝦夷地の西側一帯の警備と経営を割り当てられる
- ●文久3（1863）
  - ・江戸市中取締りを命じられる
  - ・新徴組を委任される
- ●慶応2（1866）
  - ・領内の百姓たちによる山王神社境内打寄りが起きる
  - ・大山庄太夫、赤沢隼之助など藩政改革派が拘束される
- ●慶応3（1867）
  幕命により薩摩藩邸を焼き討ちする
- ●慶応4／明治元（1868）
  - ・新政府軍が庄内藩征討を決定し、庄内藩の戊辰戦争が始まる
  - ・庄内藩が降伏する

コラム四

破軍星旗



連戦連勝の活躍で、戊辰戦争で「鬼玄蕃（げんば）がきた」と恐れられた酒井玄蕃率いる庄内藩二番大隊の破軍星旗。中国故事に倣い、北斗七星を反転し、必勝を期した。鶴岡市指定文化財。致道博物館寄託

庄内たがわ農協 藁工芸部会のしめ飾り

シャープなフォルムと
シンメトリーの美しさ
整然とそろえられた藁のすがすがしさ
こんなしめ飾りを飾ったら
いつもと違うお正月を迎えられそう?!

お正月、新たな年の神様を家庭に迎えるために、神棚や玄関に飾るしめ飾り。期間は12月28日頃から松の内までといわれているが、すぐに片付けるのがもったいないしめ飾りを発見した。

手がけるのは鶴岡市藤島地域を拠点とする「庄内たがわ農協藁工芸部会」。昔から稲作に熱心なこの地に藁工芸部会が誕生したのは昭和60年。化学肥料に頼らない農業を目指す「有機農業研究会」との同時発足で、「稲作文化は藁の文化」をモットーに、庄内の藁細工の掘り起こしや技の継承に努めてきた。しかし近年は高齢化によって人員が減り、現在は作り手が2人しかいないという。

このしめ飾りは、庄内で昔から作られてきた通称「とおし」。作り手の齋藤榮市さんいわく、以前はもっと俵型に近い形だったが、藁工芸部会で作るようになってから、耐久性や見た目を考慮して今のような形になったという。実はしめ飾りの形状は、地域性を反映して全国各地に多様なタイプがある。それらを取材して歩いた森須磨子さんは、著書の中でこのしめ飾りを「俵のしめかざり」と記し、「稲作には不向きだった北の土地」の「切実な豊作への願い」と分析している。なるほど。

しかもこのしめ飾り、材料の藁は齋藤さんが一から育てているものだという。専用の田んぼ6畝(せ)で、8月の炎天下、朝5時から手作業で青田刈りして天日干しをしているのだ。齋藤さんいわく「庄内ではしめ飾りを古くなるまで一年中飾る人が多い。新年も紙垂(しで)だけ取り替える人が多い」という。それなら、こんなに丹精込めて作られるしめ飾りを、家の守り神としてずっと飾ろっと。

齋藤さんが現在つくっているしめ飾りには、他に通称「ねじり」もある(左写真の右)。また毎年九州から大量に注文があるという「亀」と「鶴」は、縁起物として年中飾ってもOK(左写真の中央と左)。庄内地方での「とおし」の取り扱いは、主婦の店各店、鶴岡の戸村法衣佛具店、庄内町の岡本善光堂など。サイズは3種類。

藁工芸 齋藤榮市 0235-64-4739
出羽庄内地域デザイン 0235-64-0888

(取材・文　長谷川結)

庄内俳句紀行

秋麗 余目のまちを歩く

収穫の時期を迎えた
黄金色の田と青空に
赤いコンバインが映える。
やさしい日差しを受けながら
のんびりとまちを歩いた。

季語
秋麗（あきうらら・しゅうれい）
麗かに晴れ渡る秋の日。秋、陽気が良くてのどかなこと。

余目八幡神社

旧余目町は、庄内地方の中央に位置し、平成17年に立川町と合併して庄内町となった。現在の中心地は、江戸時代に周辺の農民が集住して形成されたという。

子どもたちの声が聞こえる八幡公園、その隣にある余目八幡神社の鳥居をくぐると、境内に鳥の声が響き、鎮守の森を成す欅と松の巨木がそびえ立つ。空高く枝葉を広げるその木肌に手を添え、木の鼓動と地域のこれまでの歴史に思いを寄せた。

この世をばわが世と鳶や秋麗ら

—林翔

八幡神社は、余目郷の総鎮守として養老3（719）年に大分県から勧請されたと伝えられる。文化11（1814）年に建てられた現在の社殿は、羽黒山頂に建つ三神合祭殿と様式が同じく、そのおよそ4分の1の大きさで、間近に見える彫刻を一つ一つ丁寧に辿るとその技術と迫力に圧倒される。毎年9月には例大祭が行われ、大名行列が練り歩くという。

秋麗の鳥海山立つや醤の香

—あべ小萩

八幡神社のほど近いところにある醤油蔵「ハナブサ醤油」を訪ねると、入り口では、数輪の深紅の縷紅草が季節の終わりを告げていた。文政6（1823）年創業のハナブサ醤油は、現在15代新左衛門のもと、今もほとんど職人の手作業で製造している。麹の甘い香りが漂う中、奥の枯山水に進むと借景に鳥海山を望んだ。白い竜胆の花がそっと足元に咲く。冬は一面雪景色、春には敷地内にある紅枝垂桜が見事に咲き、いつ訪れても季節の移ろいを楽しむことができるという。

余目八幡神社

風染めて金木犀は色こぼす

—田中道子

入口側の庭園では金木犀と萩が彩を添えていた。

さらに足を延ばし、南北朝時代に創建された梅枝山乗慶寺を訪れた。ここは曹洞宗の寺院で、庄内札所三十三観音霊場第十四番に数えられる。参道には白式部が揺れ、赤とんぼが出迎えてくれた。余目城主だった安保氏の菩提寺として城跡に構えた広い境内には、供養塔や梵鐘など歴史を伝えるものが数多く残る。

晩年が集まつている白式部

—山口啓介

帰り道、「払田の地蔵の松」に立ち寄った。このクロマツは全体が傘状に開き、高さ約10メートル、根まわりの枝が4.3メートルあり、樹齢370年ほどといわれる。長い間、ここで暮らす人々を見守ってきた松である。

ゆっくり歩いてみなければ出会えない景色、またそこで暮らす人と話すことで見えてくる景色もある。その土地の歴史に触れてみることは、日常の贅沢な時間となる。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

払田の地蔵の松

乗慶寺の白式部

ハナブサ醤油